

飯氏遺跡 5

－第 12 次調査報告－



遺跡略号 IIJ-12
調査番号 0723

2009

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する福岡市は、古くから大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されており、本市におきましてはこれらの保護と活用に取り組んでいるところであります。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていることも事実です。本市教育委員会では開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、その記録保存に努めています。

本書は、下水道築造工事に伴い調査を実施した飯氏遺跡第12次調査の成果を報告するものです。今回の調査では弥生時代を中心とする土器が出土し、当時の集落の一部を確認することができました。これらは、当時の飯氏地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　言

1. 本書は周船寺地区下水道築造工事に伴い、西区大字飯氏地内において発掘調査を実施した飯氏遺跡第12次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いた方位はすべて磁北である。
3. 本書で使用した遺構の呼称は、溝をSDと略号化している。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は森本幹彦、今井隆博が行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は板倉有大、米倉法子が行った。
6. 本書に掲載した挿図の製図は長家伸、板倉が行った。
7. 本書に掲載した遺構の写真撮影は森本、今井が、遺物の写真撮影は今井が行った。
8. 石器については板倉有大氏の御教示を得た。
9. 本書に関わる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
10. 本書の執筆・編集は今井が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第3章 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 遺構と遺物	5
第4章 まとめ	10

挿図目次

第1図 飯氏遺跡と周辺の主な遺跡 (1/25000)	3
第2図 調査地点と周辺の調査区 (1/8000)	4
第3図 調査区位置図 (1/1000)	4
第4図 調査区位置図 (1/250)	5
第5図 土層図 (1/40)	6
第6図 調査区全体図 (1/50)	折込
第7図 1区・2区出土遺物実測図 (1/3)	7
第8図 SD01下層出土遺物実測図 (1/3)	8
第9図 3区・4区出土遺物実測図 (1/3)	8
第10図 試掘トレンチ出土遺物実測図 (1/3)	9
第11図 出土石器実測図 (1/1)	10

表 目 次

第1表 飯氏遺跡発掘調査一覧	2
----------------	---

図版目次

図版 1

1. 1区全景（西より） 2. 2区全景（東より）

図版 2

1. 3区全景（東より） 2. 4区全景（東より）

図版 3

1. 1区全景（東より） 2. 3区全景（西より） 3. 3区北壁土層（南より）

図版 4

- 出土遺物

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成19年4月9日、下水道局建設部西部建設課（現道路下水道局下水道整備部西部下水道整備課）より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課（以下、埋文1課）に対して、福岡市西区大字飯氏地内における周船寺（飯氏11外5）地区下水道築造工事に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受け埋文1課では、申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である飯氏遺跡に含まれていることから、平成19年5月28日、6月6日、6月12日に確認調査を実施した。13本の試掘トレンチで確認した結果、4地点において現地表下約40～80cmで遺構、遺物包含層を確認した。この結果に基づいて申請者と埋文1課は協議を行い、遺跡の存在が予想される部分を対象として、記録保存のため発掘調査を実施することで合意した。その後委託契約を締結し、平成19年7月2日から同年7月11日まで発掘調査を実施した。叢理作業と報告書の刊行は平成20年度に行なった。

調査番号	0723	遺跡略号	IJ-12
調査地地籍	西区大字飯氏地内	分布地図番号	周船寺120
開発面積	473m ²	調査実施面積	60m ²
調査期間	2007.7.2～2007.7.11	事前審査番号	19-1-8

2. 調査の組織

調査委託：下水道局建設部西部建設課（現道路下水道局下水道整備部西部下水道整備課）

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

調査総括：埋蔵文化財第2課 課長 力武卓治（前任） 田中壽夫（現任）

調査第1係長 杉山富雄

調査庶務：文化財管理課 管理係 井上幸江

事前審査：埋蔵文化財第1課 事前審査係 星野恵美

調査担当：埋蔵文化財第2課 調査第1係 今井隆博

調査作業：有吉貞江 池静子 北原豊 重富千恵子 柴崎正木 末松克子 末松泉 德安勝也

西村民子 野村松江 原田静江 藤森トミ子 三苦文江 吉岡田鶴子

叢理作業：荻本恵子

尚、発掘作業から報告書作成に至るまで、道路下水道局の方々をはじめ地域住民等関係各位には多大な御協力と御理解を頂きました。記して感謝する次第です。

第2章 遺跡の立地と環境

飯氏遺跡は糸島平野の東部、高祖山の北西麓に位置し、高祖山から広がる丘陵地および扇状地上に立地する。遺跡は北・西を瑞梅寺川の支流である周船寺川で画され、南側は丘陵から段丘への地形変換線で、東側は周船寺川の支流である谷響川が形成した谷によって区切られた東西700m、南北約1kmの範囲に広がる。標高は低地部分で9m、丘陵部分で30m以上にわたる。遺跡範囲内の丘陵部分には前方後円墳である飯氏二塚古墳をはじめとする大小の古墳が分布している。

周辺の主な遺跡としては周船寺遺跡が挙げられる。周船寺遺跡では縄文時代後期の埋甕や包含層、弥生時代前期末～中期後半の甕棺墓と集落が検出されている。また、山麓周辺には今宿古墳群があり、丸隈山古墳、飯氏B14号墳、若八幡宮古墳、山ノ鼻1号墳、今宿大坂古墳、郷崎古墳などの前方後円墳が独立丘陵上や丘陵端部、山地の尾根上に分布している。

本調査地点は遺跡の北側中央付近に位置する。ここでは第12次地点周辺の調査事例について概要を記す。第12次地点の南西200m付近には今宿バイパス建設に伴い調査された第3次II区がある。弥生時代中期中頃～後半の甕棺墓65基が確認されている。その南側には第2次地点があり、古墳時代の掘立柱建物、古代末頃の円形周溝墓が検出されている。第12次地点の南東100m付近には第3次II区があり、弥生時代前期末～中期初頭の甕棺墓23基、弥生時代後期の甕棺墓6基が確認された。7号甕棺墓からには雲雷文内行花文鏡、8号甕棺墓からは平縁の舶載鏡片が出土している。第12次地点の北東100m付近には第10次地点があり、弥生時代前中期～中期初頭の甕棺墓5基、弥生時代中期後葉～古墳時代前期の掘立柱建物、土坑などが確認されている。外来系土器や韓半島系陶質土器が少量出土している。さらに北東100m付近には第9次地点があり、弥生時代中期後半の溝2条とともに大量の土器が出土した。また、同時期と思われる掘立柱建物も確認されている。溝は集落を囲む環濠の可能性も指摘されている。

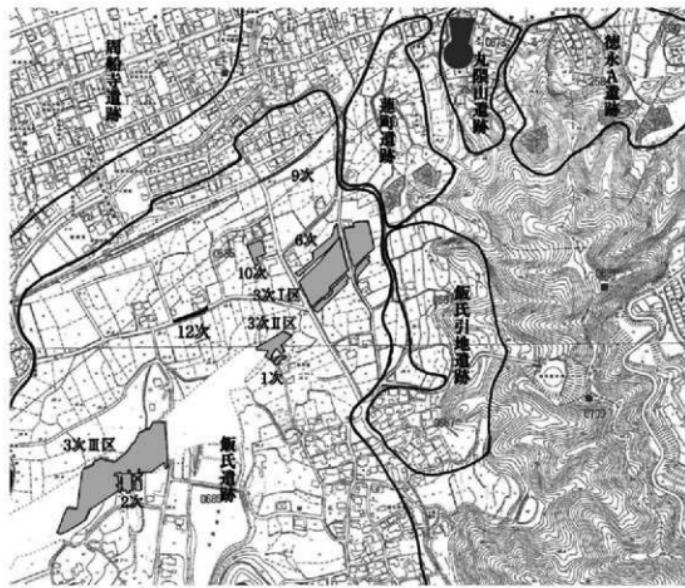
第1表 飯氏遺跡発掘調査一覧

調査次数	調査年度	所 在 地	調査原因	報告書
1次	1970年	飯氏字馬場	道路建設	今宿バイパス関係埋蔵文化財報告第2集(1971)福岡県教育委員会
2次	1971年	飯氏字鏡原	道路建設	今宿バイパス関係埋蔵文化財報告第2集(1971)福岡県教育委員会
3次	1989～1990年	大字飯氏字鏡原・馬場	道路建設	市報352、390集(1993、1994)
4次	1991年	大字周船寺・千里地区	試掘調査	市報615集(1999)
5次	1993年	飯氏字上松3筆他	幼稚園施設建設	市報390集(1994)
6次	1995年	大字飯氏地内	道路建設	市報583集(1998)
7次(欠番)	—	—	—	—
8次	1996年	大字千里276-4他	個人住宅	市報786集(2004)
9次	1998年	飯氏356-1他	鉄道複線化工事	市報654集(2000)
10次	2005年	大字飯氏876-1	公民館改築	市報922集(2007)
11次	2006年	大字飯氏666-3	個人住宅	市年報Vol.20(2007)
12次	2007年	大字飯氏地内	下水道工事	市報1026集(2009)本書



1. 飯氏遺跡 2. 周船寺遺跡 3. 今宿田遺跡 4. 山崎遺跡 5. 萬町遺跡 6. 飯氏引池遺跡 7. 丸尾山遺跡
 8. 滋永A遺跡 9. 滋永B遺跡 10. 女原遺跡 11. 女原古墳群A群 12. 女原古墳群B群 13. 女原古墳群C群
 14. 女原古墳群D群 15. 女原古墳群E群 16. 女原上ノ谷製鐵遺跡 17. 滋永古墳群H群 18. 滋永古墳群G群
 19. 滋永古墳群F群 20. 滋永古墳群D群 21. 飯氏古墳群E群 22. 飯氏古墳群G群 23. 飯氏古墳群D群 24. 飯氏古墳群C群
 25. 飯氏古墳群F群 26. 飯氏古墳群B群 27. 飯氏古墳群I群 28. 千里中原遺跡 29. 千里深谷B遺跡 30. 千里深谷A遺跡
 31. 千里深谷製鐵遺跡 32. 千里向日原遺跡 33. 協土城跡 34. 三室・井原遺跡群

第1図 飯氏遺跡と周辺の主な遺跡 (1 / 25000)



第2図 調査地点と周辺の調査区 (1 / 8000)



第3図 調査区位置図 (1 / 1000)

第3章 調査の記録

1. 調査の概要

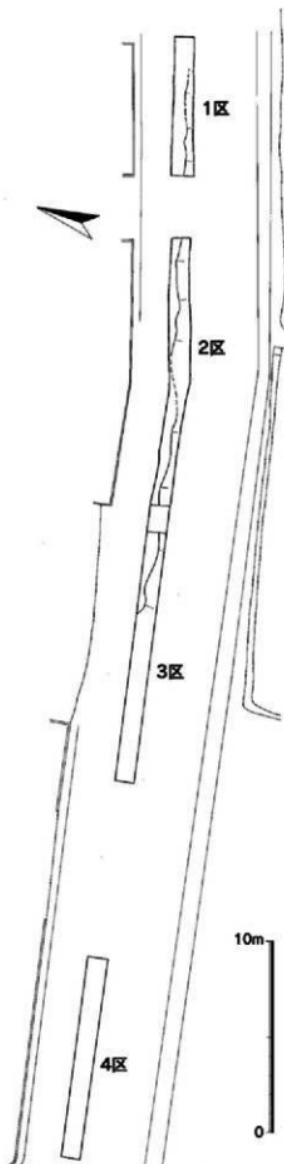
今回の調査は下水道築造工事に伴うものであるため、幅1m、長さ約60mのトレンチ状の調査となった。調査対象地を4つに分け、東から1～4区とした。調査期間中は雨の日が多くたため湧水が激しく、検出・掘削作業、土層観察が困難な状況であった。

調査区東半部の1区・2区では地山上に堆積した遺物包含層とピット、調査区に平行して伸びる溝SD01を検出した。調査区の北壁沿いに包含層と地山がみられ、南壁沿いにSD01が伸びる。調査区東側の層序（第5図-1）はアスファルト（5cm）、バラス（15cm）、盛土（10cm）、灰色粘質土（10cm）となり、その下で褐色砂質土（20cm）とSD01（青灰色粘質土）の切り合が見られる。褐色砂質土の下が弥生土器包含層である茶褐色粘質土となる。GL-100cm付近から湧水が激しく、地山面付近は十分に確認できていない。地山面の標高はおよそ11.0～11.4mである。3区では東端から4.5m付近で地山の落ちとなり、以西は黒色・灰色砂質土の堆積となる。この部分は湧水が激しく全体を掘り下げるとは不可能であった。数ヶ所トレンチを設定し深掘りをしたが、遺物はきわめて少ない。4区西端では試掘調査で黒褐色粘質土の遺物包含層が確認されていたが、試掘トレンチから東へ1mほどで遺物の出土はなくなった。ここでも深掘りをしたが、遺物は出土していない。湧水が著しいため1m以上掘り下げるとは不可能であった。本地点の出土遺物は弥生時代後期の土器を主体とするが、摩滅の著しい小片が多い。その他に縄文時代後期～晩期の所産と思われる黒曜石剥片が数点出土している。総量でコンテナケース4箱分の遺物が出土した。

2. 遺構と遺物

①1区（第6図、図版1-1、3-1）

調査対象地東端の7.5mの調査区である。調査区内は搅乱や埋設管が多く、実際の調査範囲はさらに制限された。検出した遺構は溝、ピット、遺物包含層である。調査区の北側半分には弥生土器を含む包含層が広がり、南側半分はその包含層を溝（SD01）が切る状況であった。SD01



第4図 調査区位置図 (1 / 250)

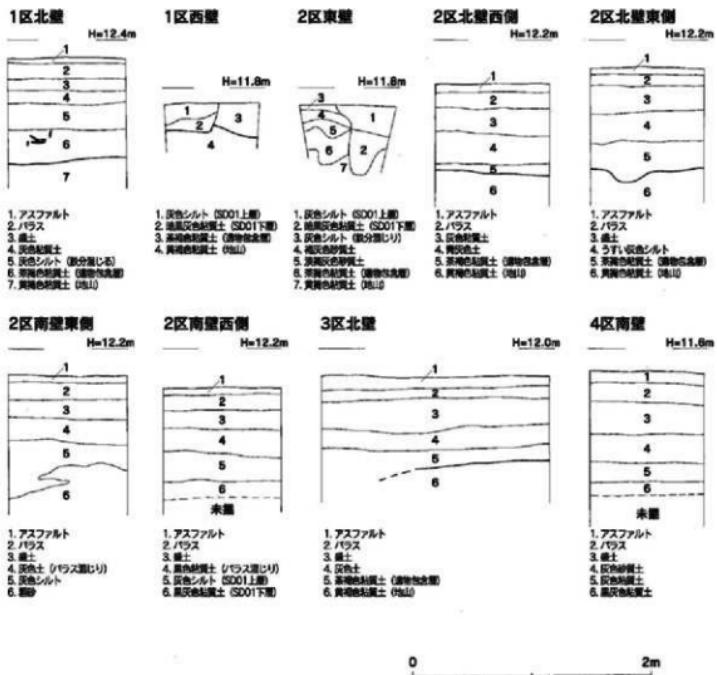
は調査区に並行しており、3区まで続いている。第5図-2は1区西壁土層図で、SD01と包含層の切り合が見られる。SD01の上層からは近世陶磁が、下層からは弥生土器が出土している。SD01の下層部分は湧水のため十分な調査が行えていない。茶褐色粘質土からは比較的多量の土器が出土したが、特に北壁東寄り部分に集中していた。1区と2区はほぼ同様の状況を示すことから、出土遺物は2区のものとまとめて報告する。

②2区（第6図、図版1-2）

1区の西側、長さ14mの調査区である。中央付近は現代の擾乱により破壊されている。基本的に1区と同様の状況で、検出遺構は溝状のSD01と茶褐色粘質土の遺物包含層、及び地山上のピット、溝状遺構である。第5図-4・5は北壁土層図、第5図-6・7は南壁土層図である。北壁沿いに地山が広がり、2区西端まで続く。地表面の標高は11.0mである。南壁西側ではSD01の上層・下層が確認できたが、南壁東側においては確認できなかった。2区においても茶褐色粘質土を中心に弥生土器が出土している。

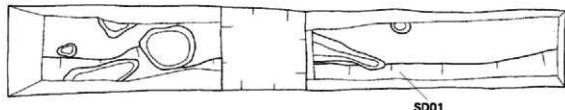
出土遺物（第7・8図）

1~19は1区・2区の茶褐色粘質土からの出土遺物である。1は甕口縁、2・3は袋状口縁の口



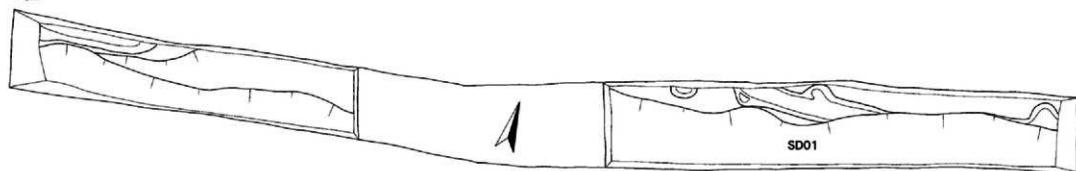
第5図 土層図 (1 / 40)

1区



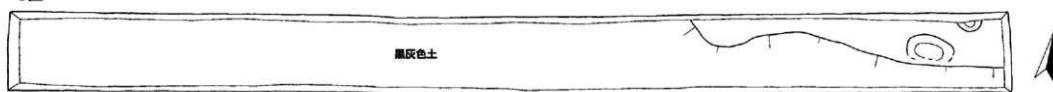
SD01

2区



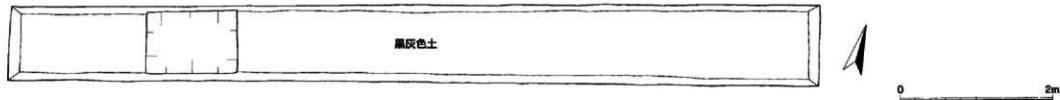
SD01

3区



黑色土

4区

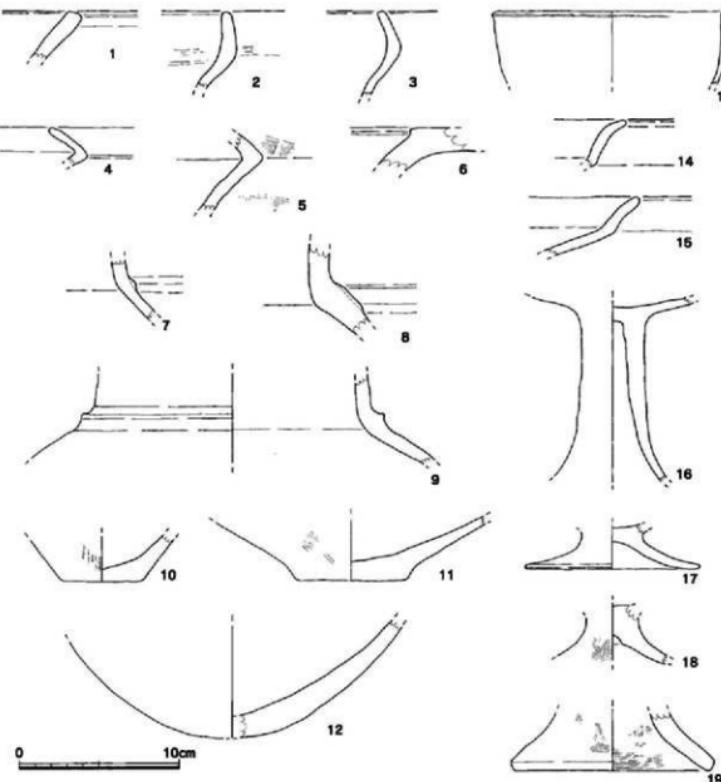


0 2m

第6図 調査区全体図 (1 /50)

縁部で、外面に緩い稜が見られる。4・5は複合口縁臺で、口縁部の屈曲が鋭い。5の外面はハケメの後にナデている。6は大型の鋸先口縁臺の口縁部片である。7～9は壺の頸部～肩部の破片で、いずれも尖帯が見られる。7・9は三角突帶、8は台形突帶である。10は平底の底部、11は壺の底部、12は丸底の底部である。13は鉢の口縁部である。口縁部内面は丁寧なナデで、端部にはヘラ痕跡が見られる。復原口径15.5cm、残存高4.6cmである。14・15は高杯の口縁部である。屈曲部から湾曲しながら外反している。16は高杯の脚部である。杯部・裾部を欠失している。17・18は脚部片である。19は器台の脚部で、復原底径12.8cm、残存高3.7cmである。

20～25はSD01下層出土遺物である。20・21は壺の口縁部で、くの字状に屈曲する。22は袋状口縁臺の口縁部で、外面にはゆるい稜をもつ。23は壺の頸部である、低い三角突帶がめぐり、外面には丹塗りを施す。器壁は薄い。24は平底の壺の底部で、復原底径6.5cm、残存高4.7cmである。25はコップ形の鉢である。復原口径8.6cm、器高8.4cmを測る。



第7図 1区・2区出土遺物実測図 (1/3)

③④区（第6図、図版2-1、3-2）

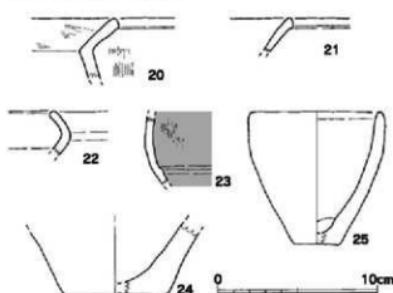
2区の西側、長さ13mの調査区である。東側は2区より続く地山が見られるが、東端より4.5m付近で落ちていき、以西は黒色・灰色砂質土となる。第5図-8は地山の落ち際付近の北壁土層図である。落ち際付近で遺物包含層である茶褐色粘質土は無遺物層へと変化するが、境界ははっきりと確認できなかった。3・4区は特に湧水が著しく、この黒色・灰色土はほとんど掘り下げることができなかつた。

出土遺物（第9図）

26はくの字形の壺の口縁部である。外面はタテハケのちヨコナデ、内面は口縁部がヨコナデ、頭部は粗いハケメが見られる。27は短い口縁部から外に広がる胸部をもつ壺である。復原口径14.0cm、残存器高7.9cmである。小片のため傾きは不確実である。外面はタテハケ、口縁部はヨコナデを施す。内面には粘土の接合痕が明瞭に残っている。内外面ともハケの後にナデを施している。

④区（第6図、図版2-2）

3区より約10m西に離れた、長さ11mの調査区である。調査区の全面が3区より続く黒色土である。第5図-9は南壁土層図である。標高10.4m付近まで掘り下がったが、湧水のためそれ以上の掘削は不可能であった。西端にある試掘トレンチからは少量の遺物が出土している。試掘トレンチより西側からは同様に遺物が出土したが、東側ではほとんど遺物は見られない。遺物の分布は試掘トレンチ周辺に限られるようである。



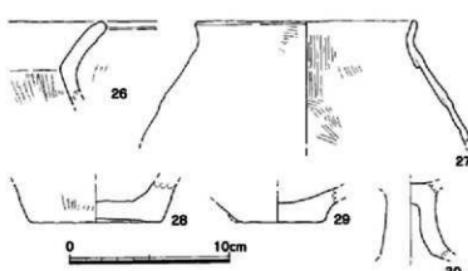
第8図 SD01 下層出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第9図）

28は壺の底部で、復原底径8.4cm、残存器高2.7cm。外面はハケメが残る。底部外面はケズリ状の強いヘラナデを施す。底部の接合痕が明瞭に見られる。29は壺の底部で、底径6.0cm、残存器高2.2cmである。30は脚部である。

⑤試掘トレンチ出土遺物（第10図）

試掘トレンチは1区・3区・4区に見られるが、そのうち1区の試掘トレンチは土器の集中部に当たっており、多量の土器が出土している。31は口縁部がくの字形に屈曲する壺である。復原口径26.0cm、残存器高12.5cmを測る。胸部外面には斜め方向のハケメが見られる。32は広口壺の口縁部で、復原口径28.0cmである。33は短い口頭部に胸部が膨らむ壺で、復原口径19.0cm、残存器高13.3cmを測る。摩滅のため調整は不明瞭である。34は壺の胸部で、外面の調整は斜め方向のハケメ、

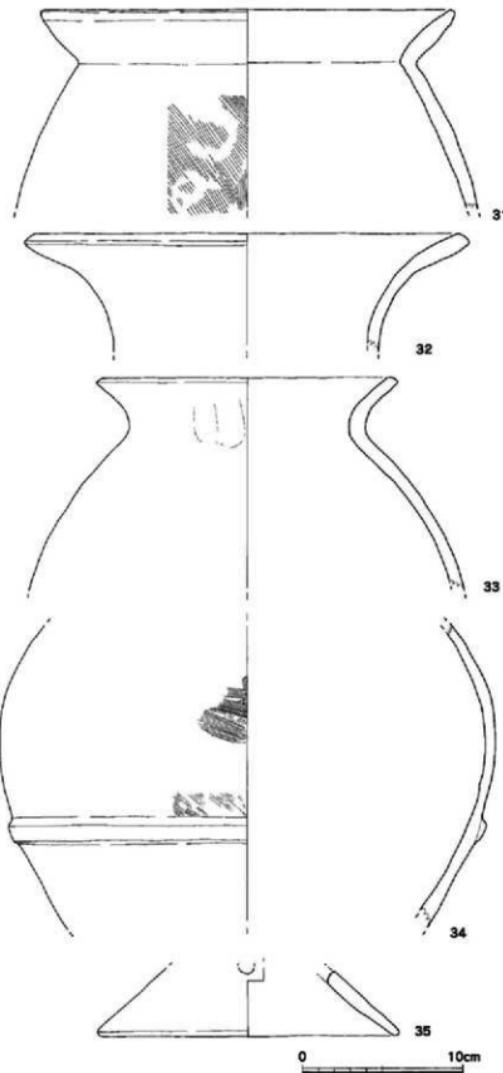


第9図 3区・4区出土遺物実測図（1/3）

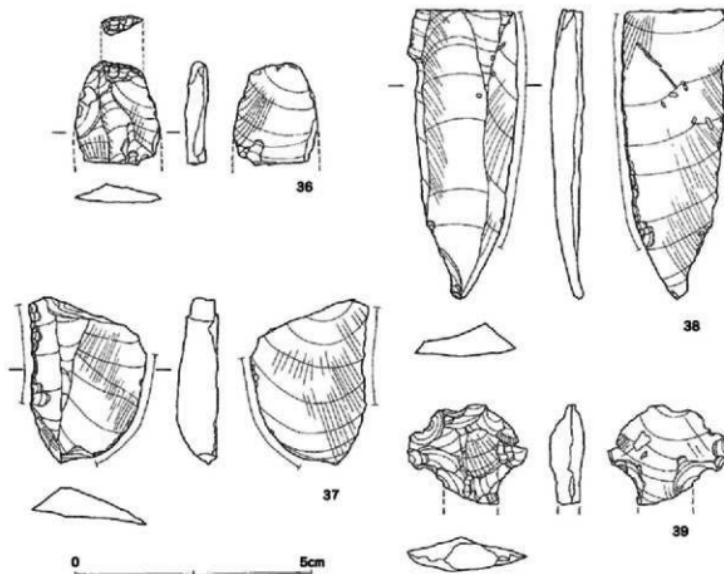
内面はナデである。胸部下半には低い台形状突帯を貼り付ける。胸部最大径の復原径は31.2cmである。35は高杯の脚部である。復原底径19.0cm、残存器高4.0cmを測る。穿孔が施されている。

⑥石器（第11図）

黒曜石剥片が9点出土したが、そのうち4点を図示した。36は2区SD01より出土した縦長剥片である。下半は折断により欠失しており、長さ2.15cm、幅1.8cm、厚さ0.45cm、重さ1.80gである。頭頂部には細かい剥離があり、打面調整が認められる。頭部調整後に縦長剥離を施している。37は2区SD01下層より出土したもので、縦長剥片の上半を折断したものである。長さ3.5cm、幅2.5cm、厚さ0.85cm、重さ5.33gである。前面に見られる3つの剥離は全て同一方向である。左側は片面微細剥離で搔器様に、右側は両面微細剥離で切削器様に使用されている。38は2区茶褐色土から出土した縦長剥片である。長さ6.1cm、幅2.3cm、厚さ0.7cmを測る。重さは7.25gである。主要剥離面の打点は折断により失われており、本来は7cm程度の縦長剥片であったと思われる。前面には3つの縦長剥離が見られ、左側2面は主要剥離に対して逆位の剥離方向である。右側に片面微細剥離が見られ、搔器様に使用されている。39はつまみ形石器である。長さ



第10図 試掘トレンチ出土遺物実測図（1 / 3）



第11図 出土石器実測図 (1 / 1)

2.1cm、幅2.5cm、厚さ0.7cm、重さ2.64gである。縦長剥片を片面から成形し、最後に両面からくびれ部を成形している。以上の4点はいずれも縄文時代後期～晩期の鉛桶技法による剥片である。

第4章　まとめ

幅1mのトレンチ調査という条件や雨・湧水のため、十分な成果が得られたとは言い難いが、地山の落ち際を確認できたことは成果の一つと言える。東半部の地山上では弥生時代の遺物包含層とピット等が確認されたことから、周辺に弥生時代の遺構が広がるものと思われる。土器は弥生時代後期を主体とするが、縦長剥片の出土から縄文時代後・晩期の遺構も周囲に存在する可能性がある。4区の北西10m及び西側10m地点には試掘トレンチがあり、北西のトレンチでは畦畔と黒色土器を検出し、西側のトレンチでは青灰色砂で谷の様相を示している。このことから、1・2区以東に台地が広がり、西側は大きな谷、北西側も低地で古代の水田が広がるものと思われる。今回の調査は非常に限定されたもので不明な点が多いが、今後の調査で周辺の様相が明らかになることを期待したい。

1. 1区全景（西より）



2. 2区全景（東より）



1. 3区全景(東より)



2. 4区全景(東より)





1. 1区全景（東より）



2. 3区全景（西より）



3. 3区北壁土層（南より）



9



11



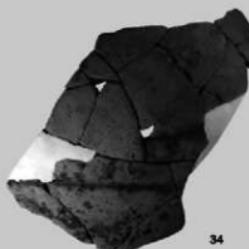
12



16



31



34



36



37



38



出土遺物 (縮尺不同)

報告書抄録

ふりがな	いいじいせき 5				
書名	飯氏遺跡 5				
副書名	第12次調査報告				
卷次					
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第1026集				
編著者名	今井隆博				
編集機関	福岡市教育委員会				
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1				
発行年月日	2009年3月31日				
調査期間	2007年7月2日～2007年7月11日				
調査面積	60m ²				
調査原因	下水道施設工事				
ふりがな	ふりがな	コード		北緯 (世界測地系)	東經 (世界測地系)
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号		
飯氏遺跡 第12次	ふくおかけんふくおかしにしく 福岡県福岡市西区 おおひでいじかな 大字飯氏地内	40135	0685	33°34'11"	130°14'50"
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯氏遺跡 第12次	集落	弥生	溝 柱穴 遺物包含層	縄文時代石器 弥生土器	台地から谷の落ち部で弥生時代後期を中心とする遺物包含層、遺構を検出。

飯氏遺跡 5

—第12次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1026集
2009年(平成21年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
TEL(092)711-4667

印刷 田堀印刷有限会社
福岡市中央区荒香江1-8-24
TEL(092)751-1785